

# 社会福祉リハビリ教育訓練 ICF 社会モデルにおける スペルマ（教育情報）の方向性について

## Set to a Social Welfare Rehabilitation Education Training ICF Social Model

水野加寿<sup>\*1</sup>，柴岡信一郎<sup>\*2</sup>， 鳥谷尾秀行<sup>\*3</sup>， 渋井二三男<sup>\*1</sup>  
Kazu Mizuno<sup>\*1</sup>， Sinnichirou Sibaoka<sup>\*2</sup>， Hideiki Toyao<sup>\*3</sup>， Fumio Shibu<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup>城西大学

<sup>\*1</sup> Josai University

<sup>\*2</sup>タイケン学園

<sup>\*2</sup> T i k e n G a k u e n

<sup>\*3</sup>秀明大学

<sup>\*3</sup> S y u m e i U n i v e r s i t y

Email:fshibui0000@yahoo.co.jp

### 1. はじめに

著者らは「水中リハビリ」を数年実施し、データをとり、その効果を分析してきた。「水中リハビリ」とは高齢者、障害者、生活習慣病者等の身体的弱者に対する健康増進運動療法」プログラムの一手段である。また、同プログラムの対象者の多くは陸上における日常生活活動において「立つこと、歩くこと」（以下同じ）が随意的に困難である。従って、このような身体的弱者及び機能低下者に対して健康増進に必要な運動の量と質を提供し、安全でやさしい運動効果の高いプールでの水治運動（運動環境）を具体化したのが「水中リハビリ」である。近年、リハビリテーション医学においては水の物理学的特性を活用した水治療法が研究されはじめ水中運動が療法として具体化されつつある。本論分では水治運動療法を基軸とした「水中リハビリ運動教室」を開設し、同教室による地域活性化への影響を考查し、地域活性化支援のモデル化を考案した。

#### 1.1 モデル化と地域活性化

「モデル化」とは「社会福祉」という視点から前述する身体的弱者に対する「水中リハビリ運動教室開設」を基軸とする市民参加型健康運動プログラムの指導、管理、運営をシステム化（図1）した活動事業体である。このシステムの特徴は「ボトムフィード（地域住民）」における情報収集を起点とした実施プログラムから得られる教育の方向性（スペルマ）を分析・解析し、その改善情報がフィードバックされるという点にある。この地域活性化事業における強力な活動エネルギーは地域住民の自主的な参

画であり、地方自治体の強力なサポート、そして実施者のボランティアイズムによるプログラム運営にほかならない。このモデル化においては情報の一元化とフィードバックシステム機能を内在させている。例えば、一般的な市民参加型健康運動プログラムの場合、そのプログラム始動時においてプログラムの情報提供（プレゼンテーション）から始められるが、ニーズの異なる不特定多数（市民）の参加率は対象者の0.3%にも満たない。しかし、このモデル化によってニュースソースとその媒体（ロコミ）が一元化されることによってマーケット・マネージメントが可能となる。これが教育情報というスペルマの効果といえる。

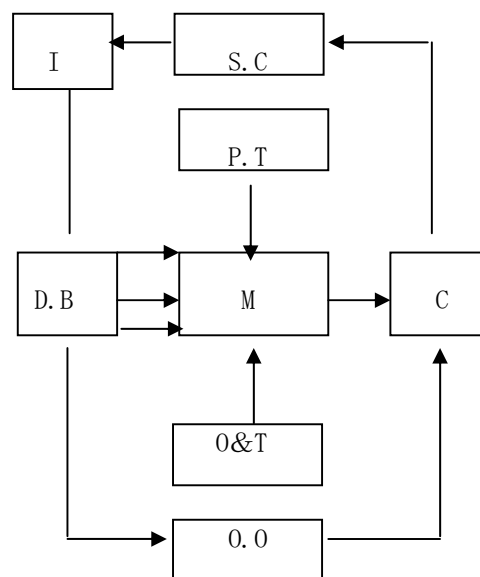


図1 市民参加型地域活性化活動システム

D.B: データベース M: モデル C: コントロール  
O&T: 運営・指導 P.T: プロジェクトチーム  
SC: スポーツセンター O.O: 運営団体 I: 市民

## 1.2 社会モデルの構築

後述する坂戸市・城西大学共同プロジェクトの一環として「社会福祉健康増進プログラム」というテーマにて市民参加型地域活性化活動システム(図1)に基づく「2010年度1期坂戸市・城西大学協同プロジェクト“水中リハビリ運動教室”」を開設し、実施した。まず始めに、「モデル化であるが、2001年国際生活機能分類<sup>(1)</sup> ICF: International Classification Of Functions, Disability and Health 以下 ICF と言うが「ICFの構成要素間の相互関係」という論評の中で「社会モデルの領域」を提案している。それによると「ICFでは具体的に社会環境要因をより重視した形で心身機能、身体構・活動・参加という三つの次元とそれらの相互作用モデル<sup>(2)</sup>として「社会モデル」が提案されている。今回、坂戸市において実施した「水中リハビリ教室」を基軸とする「水中リハビリのモデル化」は、この ICF が提唱する社会モデルを継承するものである。また、水中リハビリモデルの基軸となるプログラムは「社会福祉健康増進プログラム」を目標としてシステム化されている。そして、この社会モデルのシステム化においても ICF が提唱するアプローチ<sup>(3)</sup>を導入している。つまり、ICF アプローチにおいては WHO 国際障害分類(ICIPH)における障害分類を示しており、ICF アプローチの中に導入されている。従って、坂戸市で実施された社会モデルは ICF の障害分類によるアプローチであり、そこに示されている分類は大きく4つに区分化されたアプローチである。今回、坂戸市で実施した「水中リハビリ運動プログラム<sup>(4)</sup>」はこの4つの ICF 分類アプローチに研究課題を想定し、研究を具体化させた。例えば ICF 分類 I, 心理的变化の想定課題は“参加意義”であり研究の具体化は“プログラム参加動向”となる。この例に従って II, 生理的变化は“因子分析”であり“運動刺激の適応”となり III, 機能的変化は“立位運動”であり“運動刺激の適応”となる。最後の IV, 社会的変化では“社会化”であり“生活環境の順化”となる。今回の研究課題は、ICF アプローチ分類 I「心理的变化」及び III「機能的変化」である。一方本研究は5年間(平成22年4月～平成27年3月)という長期的なビジョンに基づく調査研究であり「坂戸市・城西大学協同プロジェクト」と呼称される坂戸市・城西大学連携地域活性化支援助成事業である。

## 2. 坂戸市・城西大学協同プロジェクト

### 2.1 水中リハビリ教室開設における調査研究報告

本論文は前述する「水中リハビリ教室」(以下プログラムという)の2年間に亘る実施運営における ICF 社会モデル, カテゴリー I, 心理変化及び III, 機能的変化についての調査研究経過論文である。

表初年度・次年度プログラム開設状況比較は、初年度(平成22年)と次年度(平成23年)におけるプログラムの開設状況を比較した表である。

表1 初年度・次年度プログラム開設状況比較

ここでは表1に見られる特徴的な変化及び改善について述べる。

#### ①開設期間及び回数の延長について

初年度は3期/年, 5回/期において同プログラムが実施されたが、次年度では2期/年, 7回/期として実施した。

#### ②プログラム参加状況について

プログラム参加募集定員に対する達成率は、初年度で100%(70名)そして次年度においても92%(55名)と高い達成率を示している。従って、この様に高い達成率が示すように同プログラムにおけるニーズは多いと考えられ、初期目標であった地域活性化健康増進プログラムの一つとしての地域貢献は果し得ているものと思われる。

年 度	平成22年度	平成23年度
期 間	H.22年9月～ H.23年3月	H.23年5月～ H.23年12月
開設期/回数	3期/5回	2期/7回
会 場	坂戸市健康増進施設(サンテ坂戸) 室内温水7°-125m	
対 象	高齢者・身体障害者(坂戸市在住・在勤)	
募集定員	70名	60名
参加者数 人数	70名	55名
%	100%	92%
継続者数 人数	12名	20名
%	17%	33%

#### <参考文献>

- [1]水野 加寿「脳性麻痺患者に対する水中運動による運動機能回復訓練処方における促進及び手技」『日本臨床医学雑誌』12-4, 1, 102 城西大学水泳部水中リハビリテーション研究会(2004.11)
- [2]水野 加寿, 柴岡 信一郎, 鳥谷尾 秀行, 坂本 重巳, 小林 裕光, 渋井 二三男「水治療法における地域創成事業構築のための e-learning システム」教育システム情報学会『第35回全国大会講演論文』pp175-76(2010.8.)